

解説



コンピュータ技術者でスタートして

Started a Career as a Computer Engineer

中島 建夫*

Takeo Nakajima

曾我 光英** (聞き手)

Mitsubide Soga

1. はじめに

本学会設立から四半世紀が経過し、設立初期からの会員は定年退職を迎えて企業人を卒業している方も多くなってきている。また、品質工学を常にリードしてきた田口玄一博士（以下、田口と記す）も2006年に病に倒れ、直接田口に触れる機会がなく品質工学に取り組んでいる会員も増えている。

そこで、生前の田口と関係の深かった名誉会員である中島建夫氏に、田口式実験計画法・品質工学で感じたこと、田口玄一との出会いを中心にインタビューを行った。

本インタビューは2019年12月21日に神奈川品質工学研究会の会合で、インタビューアである曾我光英と神奈川品質工学研究会のメンバー（以下、メンバーと記す）が聞き手として行った。

本インタビューは、田口がどんな人物であったかの記録の一つとして残すための品質工学会誌編集委員会の企画の第2弾にあたる。今後、数名の方にもインタビューを計画している。

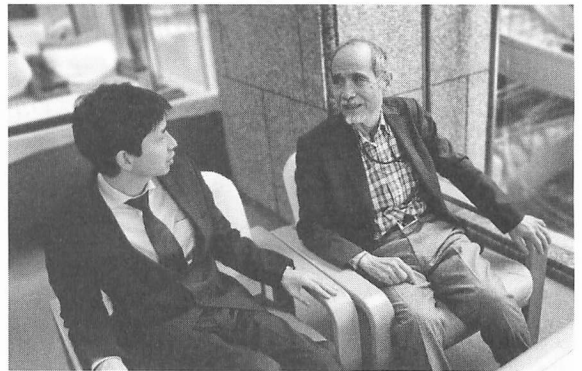
田口の人となりや思想の一端、品質工学の知見を生かした技術者のロールモデルの一つとして若手会員の参考になれば幸いである。

2. 実験計画法との出会い

曾我 まず、大学を卒業し東亜合成(株)¹⁾に入社した頃からはじめましょう。大学での専攻や会社を選んだ理由などを聞かせて下さい。

* 元東亜合成(株)

** 神奈川品質工学研究会



曾我光英 (左), 中島建夫 (右)

中島 応用物理学が専攻だったので化学メーカでは異端だった。入社時は、化学工場の技術分野でコンピュータが使えるかを検討することが課題だった。1965年のことで、今では考えられない課題であった。当時東亜合成ではコンピュータは給料計算などの事務分野に使われていたが、化学や技術で使い物になるのかという話だった。Fortran²⁾ プログラムとして雇われたと思っている。化学会社なので、数学屋、計算屋という位置づけだった。配属はプラント建設部門であった。プログラミングは入社後に勉強した。具体的な課題はプラント建設の基礎となるマテリアルバランス算出と物理現象をシミュレーションすることを期待された。

曾我 会社の職場の先輩や同僚はどんな方々でしたか。

中島 周りの人の専門は工業化学、化学機械、電気、計測などだった。計測制御機器は空気式から電気式に変わる時代であり、こちらも今では想像できない。自分はコンピュータをやるということで会社に入っ